
一夜の舞

Mam

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夜の舞

【コード】

N4369J

【作者名】

M a m

【あらすじ】

ある一夜の出来事を綴った物語。

歪に名前が彫られた小さな墓標を、朱い夕日が照らす。
そこへ少女がひとり、野花を手にやって来た。

「お母さん……、あのお花畑ね、もう少しで咲きそうだよ」
野花をそっと供えると、少女は小さく咳き込んだ。

「大丈夫だよ。お花畑にお水、毎日あげているから。心配しないで
ね」

少女は顔を歪め、両手で胸を抑えた。

「また、来るね。また、来るから。来るから…ね？」

いつも同じ。母親に別れを告げる時、少女は決まってそう言った。
まるで、最期の離別のよう。

「ばいばい」

全ての影が闇へと消えた後、少女は家へ帰った。

深い山奥の、辛うじて屋根のついている廃屋。それが彼女の家。
その家を取り囲むようにして、花畑は広がっていた。

花畑に植えられたものは、膝の下あたりまで成長していて、既にそ

の多くが蕾をつけていた。

帰ってきた少女は花畑を見渡した。

やはり、一輪も咲いてはいなかった。

蕾たちに聞こえないくらいの溜息をひとつ残して、少女は家の中へ入った。

破れたシートとベッド。脚の壊れたテーブル。

テーブルの上には、欠けたお皿と割れた花瓶。

そして、この場にはとても相応しくない、銀で美しく装飾された手鏡。

少女は着ていた服で手鏡を磨くと、自分の顔を写した。

3

「……私って、なんてブサイクなのかしら」

そう言っていると、鏡の自分に向かって微笑んだ。

肉落ちた頬は骨が際立ち、目の周りも少し窪み、御世辞すら言う気も失せる程だった。

「……ブサイクでも平気よ。だって、もう誰にも見られる事は無いんですもの」

少女はベッドに横になった。

「あと、何日かな……」

意識が遠のいてきた時、どこからか、誰かの声が響いてきた。

お前の身体はもう保たない

ちょうど明日の夜は満月だ

私達は一斉に舞う

毎日そんな身体で無茶をして、お前は私達を育ててくれた……

何か願いはあるか？

出来る限り叶えてやろう……

「……綺麗になりたい」

夢現。少女は望みを言葉にした。

「……綺麗になりたい。私だって、きっと……」
一滴。落ちた涙は幻か。

深い眠りの中、少女が見た夢は、どんなに幸せなものだったのだろう。

目が覚めて家の外へ出ると、太陽は天高く昇っていた。

「随分長く眠っていたのね。早くお水をあげなくちゃ」

家のすぐ横にある井戸で水を汲み上げる。

水の入った桶を両手で持ち上げると蹠跟きながらも、花畑で時を待つ蕾たちに適切な量の水を捲いて歩いた。

桶が空になると、井戸から再び水を汲み上げる。

少女にとってこの水撒きは、命懸けのことだった。

最後の水撒きが終わると、彼女は倒れた。

立ち上がるうとしても足が震えて立てなかった。

「嗚呼……もう立ち上がれないの？」

少女は蕾を避けるようにしてその場に寝転んだ。

「ふうー……」

ぼんやり空を眺めていると、蕾からふんわりと甘い香りが漂ってきた。

「……………」

その香りに誘われる様に、少女は再び深い眠りへと落ちた。

太陽は次第に傾き、雲を朱く染めながら森の中へ沈んでゆく。
一方反対側からは、月が昇り始めていた。
月はまだ太陽の光で青白く光っている……。

太陽が地平線の彼方へ消えた後は、暗い闇が空を覆った。
その闇を明るく照らすのは満月。
明るさ故に、星達は一向に姿を見せない。
満月は時間を掛けてゆっくりと空へ昇ってゆく。

月の光を浴びて、花畑の蕾たちは一斉に上を向いた。
少しずつ、蕾たちは開いていく……。

月が真上に昇る頃、蕾たちは美しい花と姿を変えた。
花畑は銀白の光に包まれた。

今日へ導いてくれた者よ
今宵、終りを迎える者よ
目を覚まして、さあ
私達と共に咲き誇り
私達と共に舞い散ろう…

少女ははつと目を覚ました。

傍で美しく咲いている花たちを見て、思わず歓喜に声を震わせた。

「まあっ……！まあっ……！！やっと咲いたのね！！
白くて可愛くて愛おしくて、なんて美しいの！！
ねえ、お母さん！！お花、咲いたわ！！」

母親の元へ行こうと立ち上がると、少女は自分の異変に気付いた。

「あれ？……服が違う。何？これ？……ドレス??
もともと少女が着ていた継接ぎの服とは違い、今は白いドレスのよ
うなものを身に纏っていた。

「足、痛くない……。手の肉刺も消えてる……。あれ……??
少女は家へ走った。

「おかしい！おかしいわ！！一体私どうしちゃったの！！！！」
重かった四肢はとても軽くなり、飛び跳ねたら空まで行けそうだった。

扉を開け急いで手鏡を手に取ると、自分の姿を見た。

「これ…誰？本当に、これ誰なの??」
そこには自分でない誰かが映っていた。

空いている手で頬を触って確かめた。

昼間までとは違い、ふつくらとした触り心地だった。

「この鏡に映っている綺麗な人は、私、なの……？」

髪の毛を留めていた紐を解いてみた。

あの傷んだ髪とは別物のように、髪は真っ直ぐに下りた。

少女はしばらくの間、最初で最後であろう綺麗な自分に見とれていた。

「私って、何て綺麗なのかしら……」

見飽きることのない自分の姿を映しながら、少女は家の外へ出た。

鏡の中。少女の後ろに映った満月。

自分の目でその満月を見上げると、女の子はある事を悟った。

花達は夜風に吹かれ揺れている。

少女は花を踏まないよう気を付けながら、花畑へと入って行った。

「ありがとう……。ありがとう……」

ゆっくりと、少女は一輪一輪に感謝の気持ちを伝えるように歩いた。

花畑を一周すると、銀白のドレスは月の光を十分に浴び、より一層白く、美しく輝いていた。

森を彷徨う男。

大きなリュックを背負い、首にはカメラをぶら下げ、左手には地図を、右手には回り続ける方位磁針を持っている。

「まいったなあ……。やっぱり道に迷ったみたいだ……。今夜は星が見えないからなあ……」
同じ風景が続く中、男は目をつぶって歩き出した。

梟の声、虫達の声。

そして、しばらく歩き続けていると、遠くの方から女性の声が聞こえてきた。

（誰かいるのか!?!）

男は耳を澄ませ、女性の声が聞こえる方へ歩いた。透き通ったその声は、かなり遠くの方から聞こえてきいるようだった。

歩いても歩いても全然近づいている気配は無い。それでも男は声の主を探し歩き続けた。

どれくらい歩いたか分からない。けれど気が付けば、その声はすぐ傍から聞こえてきていた。声の主である女性はどうやら歌っているようだ。

そつと瞳を開いてみる。

木々に囲まれた森の中、ぽっかりと空いた広々とした空間。中心には古びた小屋が建っていて、それを囲むように花畑は広がっていた。

天からは月の光が差し、とても幻想的な空間だった。

歌声は聞こえるものの、女性の姿が見えない。

(ここにはいないのか?)

男がその場を離れようとした時、小屋の裏から少女が姿を現した。男はとっさに木の陰に姿を隠した。

白い花弁のドレスを身に纏った少女は、優雅に舞い踊りながらどこか切ない旋律を奏でていた。魔法にでも掛けられたかのように、男はその少女から目が離せなくなった。

「美しい……」

それしかなかった。

少女が此この世の者ではないように思えたのだ。

男は首にぶら下げていたカメラを構え、一回だけ、シャッターを下ろした。

「……」

惜しみながらも、男は少女に気付かれないよう、そっとその場から立ち去った。

「

清らかに、何よりも美しく。

」

少女は花たちと共に舞い踊っていた。

ずっとこのままでいられたらと、少女は心の底から願った。しかし、その願いは叶わなかった……。

満月は傾き始めた。

少女は気にせず踊っていたが、花たちは違った。僅かに吹いた風へ、白い花びらを乗せてゆく。

「綺麗……」

花弁は上へ上へと舞い上がり、遠い空の彼方へ消えていった。花たちは風が吹くたび、舞い散ってゆく。

「みんな、いつちゃうんだ……」

少女は天へ旅立つ花たちを見送る。

満月はもう森へ沈みかけていた。

沢山の花弁が舞い散る中、少女は手鏡を手に取った。そして花畑の中で、もう一度自分の姿を確かめた。

「私、ブサイクだけど、とっても綺麗よ……」

少女はそう言っ鏡に向かって微笑んだ。

「ありがとう……。本当にありがとう……!!」

少女は天に向かって叫んだ。

花弁が散った花たちは見事に倒れていた。
その上に、少女は静かに寝転んだ。

一滴。落ちた涙は偽か。

少女は手鏡を持ったまま瞳を閉じ、時が来るのを静かに待った。

最後の花弁が天に舞い上がった。

空は次第に明るくなってゆく……。

少女は安らかに、深い眠りについた。

男は無事、村へ戻ることが出来た。
家へ帰るとさっそく、森の中で撮った写真を現像した。

「……………これは驚いた」

男が最後に撮った写真に写っていたのは、
継接ぎの服を着た、何とも見窄らしい女の子だった。

(後書き)

小説：というより物語です。

殆ど本も読まないし、語学力、文章力もありませんが、色々考えて書きました。

誤字、脱字あったら申し訳ありませんm(|) m

よろしかったら一言感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369j/>

一夜の舞

2011年1月3日23時25分発行